

日本手話におけるアスペクト —語の内在アスペクトと運動形式の関連を中心に—

佐伯 敦也

要旨

This paper focuses on a system of aspectual features in verbal signs of Japanese Sign Language. Verbal expressions are investigated to identify the features they have. Each expression can be classified based on their features into three groups: durative, punctual and non-aspectual. Relations are observed between aspectual meanings and formal movement features in verbal signs. Many of durative expressions have reduplication in their surface forms. All of punctual ones have single movements. Non-aspectual ones have nothing to do with this relation. Some signs of durative expressions have single movements, which represent motions and movements of entities. This suggests that formal movement features have different meanings in lexical signs and signs of classifier constructions. Five kinds of aspectual derivations are attested. They are interrupted differently depending on aspectual meanings of verbal signs. This shows that the both of aspectual meanings durative and punctual take important roles on verbal signs in Japanese Sign Language.

キーワード：日本手話, アスペクト, 運動形式, 語彙, クラシファイアー

1. はじめに

手話の表現形式は形式の媒体によって2種に大別される。手指表現と非手指表現である。手指表現とは手を用いた表現であり、基本的には手指の形（手形）、手指の向き、手指の位置、手指の運動という4種のパラメータによって特徴付けられる。一方、非手指表現とは眉、目蓋、視線、口（口形）、あご、上体といった部位による表現の総称である。

こうした種々のパラメータ、および表現部位のうち手指表現の運動はアスペクトを反映することがアメリカ手話（Klima and Bellugi 1979）を始め、日本手話（米川 1984; 市田 2004, 2005）でも指摘されてきた。これらの指摘に基づき、本稿は日本手話における運動とアスペクトの関係について検証を進める。以下、1.1 では本稿の目的、1.2 では本稿が対象とする内容、1.3 では先行研究に触れる。

1.1 目的

日本手話の運動とアスペクトの関係については、米川（1984）以来、指摘はあるものの断片的な記述に留まっている。本稿は運動とアスペクトの関係についての検証を進め、その体系を明らかにすることを目的とする。

1.2 対象

手指表現を用いた語彙のうち、動作的な意味を持つ語彙では手指の運動にアスペクト性が表れると指摘されている（米川 1984；市田 2004、2005）。また動作的な語彙が意味の変容によってアスペクト性が変わり、同時に手指の運動も変化するという現象も指摘されている（米川 1984；佐々木 1998）。本稿は米川、市田の指摘する語彙的アスペクトと手指運動の関係を対象とする。

1.3 先行研究

手指表現のパラメータの一つである運動とアスペクトに関係があるという指摘は、アメリカ手話の記述においてより始まった。Klima and Bellugi（1979）はアメリカ手話語彙 LOOK-AT を例として取り上げた。durative な意味では軌跡運動がなく、punctual な意味では方向性を有する軌跡運動があるとした。さらに3種の屈折形が適用され、第1屈折形が適用されると durative な LOOK-AT は protrative、punctual な LOOK-AT は incessant の解釈を受けるとした。次いで第2屈折形が適用されると durative では durational、punctual では habitual の解釈を受け、第3屈折形が適用されると durative では continuative、punctual では iterative の解釈を受けると記述した。Klima and Bellugi（1979）では LOOK-AT 以外の例はなく、記述された体系がカバーしうる範囲が不明である。また LOOK-AT を durative あるいは punctual と判断する根拠は呈示されていない。

日本手話では、米川（1984）の指摘が最初である。「〈(雨が) 降る〉はその語彙的意味を反映して、動作の上にも反復という継続があらわれる。」(p.148)、「瞬間動詞の手話単語は一般に〈死ぬ〉のように運動の方向性をもたないか、方向性はあっても運動が小さいかである。また瞬間動詞の手話単語は必ず手の運動がある。」(pp.178-179)と述べている。

米川においては〈(雨が) 降る〉¹、〈死ぬ〉が取り上げられているのみで例が少ない。また「語彙的意味」が何を指すのか、「瞬間動詞」がどのようなアスペクト性を持つのかについても言及はない。そのため記述している形式がどのような意味と結びついているのか明らかではない。

〈(雨が) 降る〉については、意味としての継続性と手指の運動形式としての「反復という継続性」が結びつく解釈できうる。しかし「瞬間動詞」については、「運動が小さい」の程度が不明瞭であり妥当性が確認できない。また「必ず手の運動がある」につい

ても運動の有無をどのように認定しているのか不明である。そのため記述の妥当性を確認することができない。米川は「様態動詞」という用語も用いているが実例がなく検証はできない。

市田（2004、2005）も内在アスペクトと形式の関連について触れている。市田（2004）は「瞬間動詞は〔＋張〕の特徴をもつ大きな運動、継続動詞は〔－張〕の特徴をもつ反復を内在した小さな運動、…（中略）…であることが多いというような傾向は明らかに存在する。」（p.16）と述べている²。しかし具体的な記述はない。また市田（2005）においては、〈決める〉、〈作る〉、〈待つ〉という語彙を挙げた上で「それぞれの動詞がもつ語彙的なアスペクト(点性、反復性、持続性)が、手の運動の1回性や反復、運動（変化）の欠如という動詞の運動タイプに反映しているのである。」と述べている。しかし語彙の具体例に限られ、語彙的アスペクトの同定についての検証はなされていない。

2. 語の内在アスペクトと手指運動

ここでは語の内在アスペクトと手指運動の関係についての検証を記述する。2.1 では、語の内在アスペクトを同定するために用いたテストと結果について述べる。2.2 では、同定された内在アスペクトと手指運動の関係について述べる。

2.1 語の内在アスペクト

語の内在アスペクトの同定にあたり、2.1.1 では調査対象者と調査対象とした表現について述べる。2.1.2 では同定のために用いたテスト、2.1.3 ではテスト結果について述べる。

2.1.1 方法

筆者が調査者として日本手話母語話者と面談した。第一次聞き取り調査は、2003 年 9 月から 12 月にかけて行った。第二次聞き取り調査を 2005 年 8 月から 11 月にかけて行った。本調査に参加したコンサルタントは 2 名である。一人は東京都出身、30 代、ろう者である。日本手話の母語話者である。もう一人は東京都出身、30 代、聴者である。ろう者の両親のもとに育ち、日本手話、日本語の二言語母語話者である。前者のろう者に対しては媒介言語として日本手話を用い、後者の聴者に対しては日本手話と日本語を用いた。筆記で記録した。調査対象とした表現は 120 例である。人が主体となる活動、身体を使う動作、存在・移動、認知活動、ものが主体となる事象、ものの存在・移動、状態・性質といった意味を持つ表現を対象とした。本稿末に付録として 120 例を掲載した。各表現とアスペクト表現との共起テストを行い、母語話者は容認度を判断した。容認度は「容認できる」「まあ容認できる」「あまり容認できない」「容認できない」の 4 段階で評価された。

2.1.2 手続き

内在アスペクトを確認する手続きとして、アスペクト表現との共起テストを使用した。第一に検証したのは「アスペクト性」という意味特徴である。アスペクト性とは、語あるいは句によって表現される事象が、時間軸上で展開するという性質のことを指す。アスペクト性の確認にあたって、始まりの段階、終わりの段階に注目するアスペクト形式と共起できれば、その語あるいは句がアスペクト性を持つことの証拠になると考えた。そこで開始段階、そして終了段階に焦点を当てることができるアスペクト形式との共起テストを行った。

開始の段階に関しては「運動の張り・少・眉上げ・目の細め・焦点・上体の傾き」という形式を用いた。「～しかける」という意味を持つ。手指動作のうち運動の特徴が張りになり、運動の開始時点から少し動く。そして非手指表現では眉が上がり、目を細め、目の焦点を手指に向ける。上体が傾く。

終了の段階については、〈終わる pa〉を用いた。これは助動詞のように用いられ事態の終了を表わす語彙である。

次いでアスペクト性を有すると判断した語、句について、下位の分類を行うため、「継続性」の有無を確認した。継続性とは、述語で表わされた事象が一定期間持続する性質である。語、句で表わされた事態に継続性があるか確認するために、〈中〉という語を用いた。この語は事態の展開局面に焦点を当てることのできるアスペクト語彙である。

以上3種のテストを通し、内在アスペクト「アスペクト性」と「継続性」の確認を試みた。

- (1) 本 / 読む - 「運動の張り・少・眉上げ・目の細め・焦点・上体の傾き」 「本を読みかける。」
- (2) 本 / 読む = 終わる pa 「本を読み終えた。」
- (3) 本 / 読む = 中 「本を読んでいる。」

2.1.3 結果

対象とした120種のうち、開始段階に注目する表現との共起について、87種の表現に関しては容認度が高かった。また9種の表現は容認度がやや高かった。そして2種の表現は容認度がやや低くなり、22の表現は容認できないという結果だった。

終了段階に注目する表現との共起については72種の表現に関しては容認度が高かった。また2種の表現は容認度がやや高かった。そして11種の表現は容認度がやや低くなり、35の表現は容認できないという結果だった。開始段階の表現と終了段階の表現とでは結果にずれがある。開始段階の方が容認度の高い表現が多かった。今回使用した開始段階に注目する形式は、状態性を持つと考えられる語彙であっても適用できるようであ

った。〈ある、いる、信じる、優れる、考え違いをする、うんざりする、好む、いらいらする、怒る（G）、怒る（E）、思う、考える、気が付く、苦しむ、困る、呑気である〉である。これらは完了としての〈終わる pa〉に対しては容認度が低かった。³

そのためアスペクト性の判断に当たって、まず〈終わる pa〉という形式が完了として機能していることを優先した。そこで〈終わる pa〉の容認度評価が「容認できる」あるいは「まあ容認できる」を示すことを主な基準とした。74種の表現が適合する。この74種に関して、開始段階に注目する表現はどれも容認度が高かった。

アスペクト性を持つと判断した語彙74種について「継続性」の有無を確認した。容認度が高かった表現は39種だった。これらに関しては継続性を有すると判断した。そして共起の容認度が低い表現は35種だった。これらは継続性を持たないと判断した。

容認度が高かった表現は以下の39種である。〈朝ご飯＝食べる、遊ぶ、イス＝作る、教える、泳ぐ、書く、呼吸する、草を刈る、車＝押す、車＝綱で引く、コップで飲む（複数）、喋る、手話で話す、スキーで滑る、咳をする、食べる、泣く（複数）、舐める（複数）、縫う、ノックする、働く、髭を剃る、勉強する、ほうきで掃く、本＝読む、読む、練習する、笑う、触る（複数）、1km＝走る、学校へ歩く、走る、歩く、痛む、雨が降る、桜＝散る、地面が揺れる、窓が閉じる、燃える〉

容認度の低かった表現は以下の35種である。〈決める、結婚する、合格する、コップで飲む（一回）、財布＝落とす、死ぬ、卒業する、泣く（一回）、舐める（一回）、入学する、発見する、ビデオ＝借りる、見る、目が覚める、持つ、蹴る、触る（一回）、立つ、跳ぶ、来る、人が離れる、出発する、到着する、大阪＝到着する、飛行機が到着する、船が離れる、単語＝忘れる、疲れる、納得する、ほっとする、雨＝止む、ガラス＝割れて散る、電車＝止まる、電灯＝消える、電灯＝点く〉

これらの結果を基に、日本手話の内在アスペクトには図1のような体系性があると考えた。まず語彙、句はアスペクト性を持つものと持たないものに分けられる。そしてアスペクト性を持っている場合、更に継続性によって下位の分類ができると考えた。ここでいう線性アスペクトとは、事態の継続的な展開局面を持つアスペクト性である。そして点性アスペクトとは、事態の継続的な展開局面を持たないアスペクト性である。

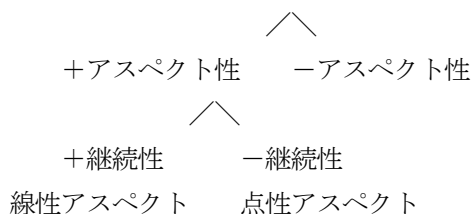


図1 日本手話における内在アスペクトの体系

2.2 運動形式と関連性

前節で主張した、アスペクト性に基づく表現の分類を形式との関連から検証を進める。以下、2.2.1 では内在アスペクトを共有する群内での運動形式の特徴を確認する。次いで2.2.2 では2.2.1 で確認できた内在アスペクトと運動形式の関連のうち、クラシファイアーの観点から例外となる群について運動の持つ意味を検証する。そして2.2.3 では1.3で紹介した先行研究と本稿の結果を比較する。

2.2.1 内在アスペクトと運動形式との関連性

日本手話母語話者に対し調査対象となる表現のビデオ撮影を行い、運動形式を観察した。一人は東京都出身、30代、聴者である。ろう者の両親のもとに育ち、日本手話、日本語の二言語母語話者である。もう一人は静岡県出身、30代、ろう者である。日本手話、日本語の二言語母語話者である。両者間では語彙に対する口形の付き方において違いが多く見られた。後者のろう者の方が日本語口形を付けることが多かった。しかし手指表現の運動形式においては共通しており差異はなかった。線性アスペクトを持つ群は、軌跡運動であれ回転運動であれ、反復性を持った運動形式を示す傾向にあった。39種の表現のうち、30種が反復性の運動形式を特徴として持っていた。そして残りの9種は軌跡運動でも回転運動でも、一回のみの運動をするという特徴を持っていた。点性アスペクトを持つ群は、全て一回のみの運動をするという特徴を持っていた。

なおアスペクト性を持つとは判断しなかった語彙は46種あったが、反復性の運動を持つ表現が14種、一回性の運動を持つ表現が32種だった。以上をまとめると、線性アスペクトを持つ群は反復性という傾向を持ち、点性アスペクトを持つ群は一回性を持つことが分かった。アスペクト性を認められない群は、運動形式について一回性を持つ表現が多いものの、確かな傾向は確認できなかった。

2.2.2 内在アスペクトと運動形式との関連性：クラシファイアーの観点から

線性アスペクトを持ち一回性の運動を持つ表現群では、運動がどのような意味を持つのか。クラシファイアーの観点から分析を試みる。以下ではまずクラシファイアーについて概略を説明し、次いでクラシファイアーを用いた分析を行う。

一般的に手話の手指表現は形態論的な観点から2種に大別できる。語彙とクラシファイアーである。クラシファイアーは、Zwisterlood (2012) によるとこれまで報告されたほぼ全ての手話言語に備わる形態論的カテゴリーである。日本手話にも存在する。

手指表現は手指の形、向き、位置、運動という4種のパラメータによって特徴付けられるが、語彙は各パラメータが固定され、それらが合わさり原則として一つの音節を成し、一つの表現および意味を表す。

クラシファイアーも4種のパラメータをとる点では同じだが、各パラメータが個別に

意味を持ち得、その上で合わり表現および意味を表す。語彙では各パラメータが音素に相当し、合わり構成されたものが形態素に相当する。一方、クラシファイアーでは各パラメータが音素および形態素に相当する (Emmorey 2001)。

Supalla (1986) はアメリカ手話に基づきクラシファイアーの分類を行った。クラシファイアーの典型的な表現は、**semantic classifier** で移動表現である。日本手話で例をあげると、G 手形 (本稿の手形の名称はアメリカ手話のアルファベットに準じる。以下、同様。) は移動する人、掌の向きは人の向いている方向、位置は移動の出発点、到着点など、運動は移動の軌跡や様態を示す。以上が合わり、「ある人が、ある方向を向いて、ある場所からある場所まで、ある軌跡と様態をもって進む」ことを意味する。他にもクラシファイアーでは、空間上の位置、ものの操作、物体の形状、表面の質感などを表現する。

Zeshan (2003) などをはじめクラシファイアーは手話における新語形成の源であるという指摘がある。語彙はコミュニティ内で使用される慣習化した群である。しかし表現すべき内容に対して語彙がない場合、話者はクラシファイアーを用いてその場で新規に表現を作成する。これが定着し慣習化すればコミュニティ内の語彙となる。これを語彙化と呼ぶ。語彙化の過程では4種のパラメータが固定する。このように語彙は慣習化された表現の集合でより閉じられた系である。一方、クラシファイアーは手話話者に委ねられる表現の自由度が高い。より開かれた系で、新規の表現が作成される源である。例えば **instrumental hand classifier** を用い車のハンドルを操作する手の様子を表現し、これが慣習化され手話語彙<(車を)運転する>、<車>となっている。クラシファイアーとしては手形を変化させ手形 O ならば細めのハンドル、手形 C なら太いハンドルを表す。手指の位置を変化させることでハンドルの大小を様々な程度で表現できる。また運動を変化させることでハンドルの回転回数、回転の角度など様々な表現できる。位置、運動はその弁別可能な数が有限個か無限個か明らかではなく、自由度は高い。一方手話語彙として<(車を)運転する>、<車>ではパラメータが固定し手形は S、位置は胸前の手話空間、運動は上下、掌の向きは右手は左、左手は右である。

ただし語彙とクラシファイアーは必ずしも明確に分かれるわけではない。Johnston and Shembri (2007) などでは、慣習化が進み、手話話者によるクラシファイアーの意識が及ばない表現がある一方、慣習的に使用されるが、各パラメータへのクラシファイアーの意識は残るものが多いことを指摘している。

ここから本稿の調査結果の考察に戻る。

クラシファイアーについての概説で **semantic classifier**、**instrumental hand classifier** を紹介した。その両者において運動形式は移動の軌跡を示した。**semantic classifier** の例では、手形が示す人の移動の軌跡を示し、**instrumental hand classifier** は手形が示す手の動きの軌跡を示した。他にも手形が操作する物体を示す **tool classifier**、四肢や関節などを示す **body part classifier** があるが、いずれも運動形式は人、動物、ものなどの移動を一義的には表

現する。

線性アスペクトを有し、一回性の運動を持つものを改めて振り返ると **semantic classifier** または **instrumental hand classifier** である。全くの新造語ではないので慣習性があると考えられるが、話者の判断では運動は移動の軌跡を表現し、クラシファイアーとしての意識が強いといえるだろう。

手話母語話者に運動形式の方向を変化させたときに生じる意味変化について聞き取り調査を行った。特に運動の方向に着目したのは、4 パラメータのうち自由度が高く、意味の解釈が明瞭だからである。(4a) から (4g) は **semantic classifier**、(4h) から (4j) は **instrumental hand classifier** にあたる。

- (4) a. 〈歩く〉：歩く方向が変わることを示す。
- b. 〈泳ぐ〉：泳ぐ方向が変わることを示す。
- c. 〈学校へ歩く〉：学校への経路の途中で曲がる箇所があることを示す。
- d. 〈桜＝散る〉：桜の花びらが途中で方向を変えて落ちることを示す。
- e. 〈燃える〉：炎の立ち上がる向きが変わることを示す。
- f. 〈スキーで滑る〉：滑走の方向が変わることを示す。
- g. 〈窓が閉じる〉：窓の開閉部分の方向が変わることを示す。
- h. 〈車＝押す〉：押す方向が変わることを示す。
- i. 〈車＝綱で引く〉：引く方向が変わることを示す。
- j. 〈縫う〉：縫う方向が変わることを示す。

慣習化が進んだ語彙では運動の変化は表現として不自然になる。例えば〈遊ぶ〉について母語話者に尋ねても、クラシファイアーとして内部構造を分析的に捉える意識はかなり薄い。想像力を働かせれば **semantic classifier** として両手の G 手形が人を表し、反復は遊びに興じて行き交う移動の様子だとみなせなくもない。または **instrumental hand classifier** として G 手形は遊びに用いる細長い棒で、反復は両手で振り回している様子なのだとみることでもできる。しかしこれらの解釈には確からしさはない。各パラメータは単独では意味を持たない。それぞれが合わさって語を形成し、〈遊ぶ〉として線性アスペクトが運動形式の反復と関連するのである。

語彙はたとえ慣習化していてもクラシファイアーの意識が残るものが多いという指摘がある。線性アスペクトを有し反復を持つ群では、〈書く、呼吸する、草を刈る、コップで飲む（複数）、朝ご飯＝食べる、手話で話す、咳をする、泣く（複数）、舐める（複数）、ノックする、髭を剃る、ほうきで掃く、本＝読む、触る（複数）、走る、雨が降る、地面が揺れる〉があてはまる。ただし手話話者の中で個人差はある。これらは特に手形と運動は単独で表現する意味が意識されやすい。そのため運動は移動の軌跡および線性

アスペクトの両方が示されているとも考えられる。

点性アスペクトを持つ群に関しては、クラシファイアーの意識が強く運動が一義的に移動を示すとみなせるものは〈財布＝落とす、立つ、跳ぶ、飛行機が到着する、ガラスが割れて散る、人が離れる、船が離れる〉だった。それぞれ運動の方向を変えると「財布、人、ガラスの破片、飛行機、船」の移動の軌跡が変わることを意味する。ただこれらは他の表現群と運動形式の明確な違いはない。

点性アスペクトと一回性を持つ群でもクラシファイアーの意識が残るものはある。〈コップで飲む（一回）、卒業する、泣く（一回）、舐める（一回）、目が覚める、持つ、蹴る、触る（一回）、来る、出発する、到着する、単語＝忘れる、ほっとする、雨＝止む、電灯＝消える、電灯＝点く〉だが、やはり個人差がある。線性アスペクトの場合と同じく、運動は移動の軌跡および点性アスペクトの両方が示されていると考えられる。

クラシファイアーとしての意識が強く、運動が移動の軌跡を第一に示す表現を除くと、内在アスペクトと運動形式が一对一で結ばれることが分かった。線性アスペクトは反復性という運動形式上の特徴、点性アスペクトは一回性という運動形式上の特徴と結びつく。アスペクト性を認めなかった群については、運動がどのような意味・機能を果たしているか不明である。

2.2.3 先行研究と本稿の結果の比較

アメリカ手話と日本手話は歴史的、および地理的な類縁関係はない。しかし動詞語彙において重要としうるアスペクト性が Klima and Bellugi (1979) と本稿では共通した。Klima and Bellugi (1979) の *durative* は本稿での線性アスペクトに、そして *punctual* は点性アスペクトに相当しうる。適用される屈折または本稿での派生形式自体は異なるものの、*durative* か *punctual* または線性アスペクトか点性アスペクトという動詞のアスペクト性に従って、適用された屈折あるいは派生形式の解釈が分かれる点も類似していた。本稿では適用される派生と解釈について次章以降で述べる。

線性アスペクトを持つ群は、米川 (1984)、市田 (2004) の「継続動詞」に相当するだろう。彼らは「継続動詞」「継続性」の意味的な面については言及していない。一方、形式に関しては「反復」という語を用いて特徴づけをしている。彼らの記述と本研究の結果を比較すると、彼らは過剰な一般化をしたのではないかと疑われる。〈泳ぐ〉、〈歩く〉は一回性の軌跡運動であるからである。〈泳ぐ〉、〈歩く〉は伸びた指を交互に動かす運動を伴うため、反復性を内包しているともいえるが〈スキーで滑る〉、〈窓が閉じる〉は指の動きはない。原則的に肩、肘、手首の関節に基づく運動の特徴を基準として反復性と一回性を区別し、クラシファイアーでは運動が移動経路を表し、語彙における運動とは意味の表れ方が異なると本稿は主張する。

一方、点性アスペクトを持つ群は、米川 (1984) と市田 (2004) での「瞬間動詞」に

相当するだろう。米川は「運動の方向性をもたないか、方向性はあっても運動が小さい」(p.179)と運動の方向性と大きさに言及し、市田は「[+張]の特徴を持つ大きな運動」と手指の筋肉の緊張度である[+張]という特徴と運動の大きさに言及している。本稿の調査範囲内では米川の記述も、市田の記述も部分的には適用しうる。米川が主張するように<決める>は接触運動で方向性がなく、<死ぬ>は肘と手首を用いる比較的小さな運動である。また市田の主張するように<決める>は[+張]を持つ。しかし本稿で点性アспектを持つとした群の全てがそれらの特徴を共有するわけではない。運動の特徴のうち明確に共有されるのは一回性であった。[+張]については、<ほっとする>、<単語を忘れる>、<見る>が反例となる。「運動の小ささ」は基準が不明であるためこれ以上の論考は留める。

3. 内在アспектと派生

線性アспект、点性アспектはそれぞれ運動形式上の特徴と結びついていた。更にアспект性は、個々の表現が派生形を持った場合の意味に影響するようである。ここでは派生形を適用した場合、アспектに基づいた各群がどのような意味を持つか確認する。なお派生形に関しては、前節においてクラシファイアーであると判断した表現を除いた。それは次の理由による。一つは本稿の対象は語彙領域の表現であるからである。もう一つは語彙領域の表現とクラシファイアー領域の表現がたと同じアспект性を有していても派生を適用した場合の意味が必ずしも統一しないからである。線性アспектを持つクラシファイアーは、その一回性の運動形式で人やものの移動の軌跡を表わしていた。このように語彙とクラシファイアーでは形式と意味の関係が異なっている。そのため派生形の適用に関しても、語彙領域の表現と必ずしも同じ意味が表われるわけではない。そこで語彙領域にあると考えられる表現に絞ることにした。以下、3.1から3.5まで5種の派生を検討する。そして3.6では内在アспектと運動形式、そして内在アспектと派生の解釈についてまとめを行う。

3.1 反復を用いた派生

運動形式に反復性の特徴を持たせる派生である。一回性の運動形式の場合は反復性の運動形式に変えて表現する。そして、もともと反復性を持っている表現の場合は更に反復をして表現する。線性アспектを持った表現では、第一に事態が長く続くということを示す(5)。そして(6)のように一脚のイスという限界点を与えられた場合でも、作成したイスの数が多いということは示さず一脚のイスにかけている時間が長いということを示す。イスの数が多い場合は、手指表現を片側から片側へ移動させるか、視線を片側から片側へ移動させるという動きを伴う。しかし(7)、(8)では時間の長さだけ示すのではない。(7)では食べる量、(8)では降った雨の量の多さも表わす。

- (5) 昨日 / 喋る－[反復] 「昨日、長い間喋り続けた。」
 (6) 昨日 / イス / 作る－[反復] 「昨日、一脚のイスを長い間作り続けた。」
 (7) 朝 － ご飯 / 食べる－[反復] 「朝ご飯を大量に食べる。」
 (8) 昨日 / 雨が降る－[反復] 「昨日、大量の雨が降った。」

点性アスペクトを持った表現では、事態の長さは表さず述語と結びつく主体や対象物の数の多さを表わす。(9)、(10)。しかし、(6) が手指の片方側への運動や視線の移動を伴ったように、(9)、(10) でもそれらの運動、移動を伴うとより自然な表現となる。

つまり反復は線性アスペクトを有する表現について事態の長さという意味を付加させる。また線性か点性かのアスペクトの種類によらず述語と結びつく主体や対象の複数性を述語において符号化するのである。

- (9) 爆発が起こる / 死ぬ－[反復] 「爆発が起こり、多くの人が死んだ。」
 (10) pt1 / 学校 / 卒業－[反復] 「私は多くの学校を卒業した。」

〈コップで飲む〉(一回)、〈泣く〉(一回)、〈舐める〉(一回)、〈触る〉(一回)は、線性アスペクトを持つ〈コップで飲む〉(複数)、〈泣く〉(複数)、〈舐める〉(複数)、〈触る〉(複数)もある。前者は点性アスペクトで一回性の運動、後者は線性アスペクトで反復性の運動を持つ。その他、手形、位置、掌の方向は同じである。しかし両者はミニマルペアを作らない。なぜなら前者は運動の質が「張り」であり、後者は「緩み」だからである。そのため、反復の派生を適用し点性アスペクトの〈コップで飲む〉(一回)の運動を反復性にしても線性アスペクトの〈コップで飲む〉(複数)とは同じ表現にならない。

3.2 運動の張り・静止・眉上げ・目の細め・非焦点・上体の傾きを用いた派生

手指運動だけでなく、非手指運動も用いる派生形式である。手指運動の側は、運動の質を張りにし、形式的な運動の開始を静止させておく。しかし上体は前寄りにじりじりと傾くのでそれと共に手指表現もやや動いてみえる。そして非手指表現の側では、まず眉を上げ、目を細める。そして視線は手指から外すか、手指に向かっている手指に焦点を合わせないようにする。焦点を手指に合わせるか否かが、次節の派生との明確な違いになるため視線の用い方が重要となる。これは米川が「将現相」と呼んだアスペクト派生である。この派生について米川は「〈歩く〉の運動をせず、体を前へ倒す」(p.178)としている。確かにこの通りであるが、筆者の観察では手指表現は動いている場合もあり、手指表現だけではこの派生形式であるとは認められない。むしろ視線および目の焦点の利用が欠かせない要素である。この派生形式を適用すると、線性アスペクトでは表現されている事態の意味的な開始点の直前を焦点化することができた (11)。

- (11) 勉強－〔運動の張り・静止・眉上げ・目の細め・非焦点・上体の傾き〕 ＝ 時
／ 犬 CL－じゃれる 「勉強をしようとしたら、いぬがじゃれてきた。」

一方、点性アスペクトを持つ表現へ適用されると、2 種の意味を示す。一つは事態の起こる準備段階の開始点の直前に焦点を当てる場合 (12)、もう一つは事態の開始点の直前である (13)。点性アスペクトの群は 28 種の表現があるが、このうち前者のタイプが 18 種、後者のタイプが 8 種、状況に依存するため両方になりうるタイプが 3 種あった。事態の開始点の直前に注目するのは〈納得する〉、〈ほっとする〉、〈出発する〉、〈疲れる〉、〈見る〉、〈目が覚める〉、〈電灯＝点く〉、〈泣く〉(一回)、状況に依存するのは〈コップで飲む〉(一回)、〈舐める〉(一回)、〈触る〉(一回) だった。

- (12) 死ぬ－〔運動の張り・静止・眉上げ・目の細め・非焦点・上体の傾き〕－pt3 「彼は死ぬかもしれない。(蓋然性は低い)」
(13) 出発－〔運動の張り・静止・眉上げ・目の細め・非焦点・上体の傾き〕 ＝ 時
／ 爆弾落ちる 「出発の直前、爆弾が落ちた。」

3.3 運動の張り・少・眉上げ・目の細め・焦点・上体の傾きを用いた派生

手指運動だけでなく、非手指運動を用いる派生形式である。手指運動の側は、運動の質を張りにし、形式的な運動を少しだけ行う。そして上体が前寄り傾く。非手指表現の側では、まず眉を上げ、目を細める。そして視線は手指に向かい、手指に焦点を合わせる。「将現派生」と仮に呼んだ派生とは、手指表現の面では実際上ほとんど変わらない。しかし焦点を手指に合わせる点で明確に異なる。これは米川が「始動相」と呼んだアスペクト派生である。この派生について米川は「〈歩く〉を途中でやめ、同時に体を前へ倒す」(p.178)としている。しかし手指運動と上体の前傾は同時にも起こる。むしろ明確なのは目の焦点の使い方である。この派生形式を適用すると、線性アスペクトでは表現されている事態の意味的な開始点、の直後を焦点化することができた (14)。

- (14) 勉強－〔運動の張り・少・眉上げ・目の細め・焦点・上体の傾き〕 ＝ 時
／ 犬 CL－じゃれる 「勉強をしかけたら、いぬがじゃれてきた。」

一方、点性アスペクトを持つ表現へ適用されると、2 種の意味を示す。一つは事態の起こる準備段階の開始点の直後に焦点を当てる場合 (15)、もう一つは事態の開始点の直後である (16)。表現がどの意味を持つかについては「将現派生」と同じであった。つまり 28 種の表現のうち、前者のタイプが 18 種、後者のタイプが 8 種、状況に依存するため両方になりうるタイプが 3 種であった。事態の開始点の直前に注目するのは〈納得す

る〉、〈ほっとする〉、〈出発する〉、〈疲れる〉、〈見る〉、〈目が覚める〉、〈電灯＝点く〉、〈泣く〉（一回）、状況に依存するのは〈コップで飲む〉（一回）、〈舐める〉（一回）、〈触る〉（一回）だった。これら以外は事態の起こる準備段階の開始点の直後に焦点があたった。

- (15) 死ぬ－〔運動の張り・少・眉上げ・目の細め・焦点・上体の傾き〕－pt3 「彼は死ぬかもしれない。（(12) よりも蓋然性はやや高い）」
- (16) 出発－〔運動の張り・少・眉上げ・目の細め・焦点・上体の傾き〕＝時／爆弾落ちる「出発の直後、爆弾が落ちた。」

3.4 一回性・運動の張り・静止を用いた派生

表現の持つ運動を一回にし、そして運動に張りの性質を与えつつ軌跡運動を行い、運動の終了点で静止を挿入するという形式を持った派生である。この派生に対しては、通常、眉を下げ、目を細め、口角を横に引くという非手指表現も共起する。

この派生形式を適用すると、線性アスペクトを持った群では表現される事態がある程度長く続くことを示す(17)。また量が多いことも示す(18)。線性アスペクトにおいて、この派生は3.1 で取り上げた「反復を用いた派生」と意味的に重なる。

この一回性・運動の張り・静止を用いた派生は、その具体的な仕組みは明らかではないが「反復を用いた派生」が音韻的に変化したもののようである。軌跡運動が終わり、静止する直前、小刻みに揺れる傾向がその証拠であると考えられる。

- (17) 本／読む－〔一回性・運動の張り・静止〕＝中－pt3 「彼／彼女はしばらくの間、本を読み続けている。」
- (18) 働く－〔一回性・運動の張り・静止〕＝終わる pa－pt1 「私は大量の仕事をした。」

一方、この派生が点性アスペクトを持った群に適用された場合、第一には事態が開始、あるいは変化する限界点へ注目することになる。しかし3.2の〔運動の張り・静止・眉上げ・目の細め・非焦点・上体の傾き〕、3.3の〔運動の張り・少・眉上げ・目の細め・焦点・上体の傾き〕で事態の開始点あるいは変化点の直前、直後に焦点が当たっていた表現に関しては別である。〈納得する〉、〈ほっとする〉、〈電灯＝点く〉については、完全に納得／安堵／点灯する直前に焦点が当たる。しかし〈出発する〉、〈目が覚める〉、〈泣く〉（一回）はこの派生自体できない。〈コップで飲む〉（一回）、〈舐める〉（一回）、〈触る〉（一回）については、状況次第で使用できた。例えば〈触る〉（一回）は、対象に触れる直前に注目することになるが、対象がなければ直前も設定できないためこの派生はできないことになる。〈見る〉、〈疲れる〉に関してはこの派生が適用できるか不明だった。

- (19) 死ぬー[一回性・運動の張り・静止]ーpt3「彼は死ぬ間際だ。(蓋然性が非常に高い)」

3.5 一回性・運動の緩みを用いた派生

運動を一回性の運動にし、運動の質を緩みにして表出する派生形式である。この派生は、線性のアスペクト性を持った表現にしか適用されない。この派生が適用されると、perfectivity (Comrie 1976) が生じるようである。この派生形式が適用されるときは完了の標識である〈終わる pa〉と共起する傾向がある。完了と相性が良いという点で perfectivity ではないかとしたが、現在では不明瞭であり示唆するに留める。またこの派生形式を認めるかについては母語話者間で直観が異なった。〈食べる〉、〈朝ごはん=食べる〉、〈読む〉、〈本=読む〉は共通して認められたが、その他の表現については認めないとする母語話者がいた。

3.6 まとめ

アスペクト性を持った群は線性アスペクト、点性アスペクトのうち、どちらのアスペクト性を持つかによって、派生が適用された場合の意味が異なることをみてきた。このように内在アスペクトによって派生が適用された場合の意味が二分されるということは、線性アスペクトと点性アスペクトを認める上で妥当性を高めると考える。

4. まとめと今後の課題

本稿では、第一に「アスペクト性」と「継続性」というアスペクトに関する意味特徴を基に日本手話表現を分類することを試みた。これによって 120 種の表現が線性アスペクトを持つ群、点性アスペクトを持つ群、アスペクト性を認められない群という 3 種の分類を行った。

次に、アスペクト性を持つ群についてその妥当性を形式との関連から検証することを試みた。その結果、アスペクト性は運動形式と密接な関連を示すことが分かった。線性アスペクトは「反復性」という運動形式上の一特徴と、そして点性アスペクトは「一回性」という運動形式上の一特徴と一対一の対応を示す。しかしこれはあくまでも語彙領域での意味と形式の関連であった。クラシファイアーの特徴を有する表現に関しては、アスペクト性は必ずしも反復性と一回性とは結びつかない可能性があることが示された。このことから語彙領域とクラシファイアー領域は、それぞれ異なる意味と形式の体系性を持つことが示唆された。

また、5 種の派生形式を適用し、線性アスペクトを持つ群、点性アスペクトを持つ群においてそれぞれの群が異なる意味を示すことを確認した。反復を用いた派生では、線性アスペクトは時間の継続あるいは述語と関係する主体、対象の量が多いことを意味し

た。一方、点性アスペクトの場合は述語と関係する主体、対象の複数性を意味した。「将現派生」を用いた派生では、線性アスペクトの場合事態の開始直前を、そして点性アスペクトの場合は準備期間の開始あるいは事態の開始直前に焦点が当たった。「始動派生」を用いた派生では、線性アスペクトの場合、開始直後を、そして点性アスペクトの場合は準備期間の開始あるいは事態の開始直後に焦点が当たった。一回性かつ張りをを用いた派生では、線性アスペクトの場合、時間の継続あるいは述語と関係する主体、対象の量が多いことを意味した。一方、点性アスペクトを持つ表現の場合、事態の開始や変化を示す限界点への焦点が当たった。しかし示している事態の性質によっては、この派生を適用できない例もあった。そして一回性かつ緩みを用いた派生は線性アスペクトの群にのみ適用され、*perfectivity* を示すかのように考えられるが不明瞭であった。このようにアスペクト性のタイプが、派生を適用した表現の解釈や派生自体の可否への影響を与えるように考えられる現象があった。以上の結果から、アスペクト性という抽象的な意味特徴が個々の表現内の運動形式として視覚化されていること、また運動形式を用いた派生の意味に影響を与えることが確認できた。

今後の課題としてまず挙げられるのは、語彙領域のアスペクト性を持った表現がアスペクト性以外に何を形式として表わしているか探ることである。今回取り上げたのは線性、点性というアスペクト性のみだった。しかし派生の適用を解釈することから、形式としての運動の開始点、終了点がそれぞれ意味的な開始限界、終了限界を示す可能性もみてとれた。このように日本手話は抽象的な意味を形式化している可能性がある。

更に興味深いのはクラシファイア領域の表現である。アスペクト性と形式との関連に対して、クラシファイアという視点を取り入れることで一つの解答を得ることができた。クラシファイアにおいて、アスペクト性は表現されるのか。もし表現されるとすれば、語彙領域とはどのような異同、体系性の違いがあるのかが疑問となる。語彙領域と同様、クラシファイア領域も研究の対象とすることによって、日本手話における意味と形式の関連に対する深い理解が得られるだろう。

註

* 本稿は、日本言語学会第 132 回大会（2006 年 6 月 18 日、東京大学）における口頭発表の内容をもとに加筆修正したものである。

¹ 日本手話に限らず、手話には能記を表わす方法がない。そこで手話単語に対して音声言語から借りた単語、あるいは連語をラベルとして付与することが慣習化されている。本発表において、〈 〉は全て日本手話語彙（サイン）であることを示す。なお、日本手話語彙（サイン）と日本語ラベルは例文等で使用する意味の点で類似しているのみである。日本語ラベルはあくまでも便宜的なものであって、表わしている日本手話語彙の品詞カテゴリーや意味範囲までは指していない。

- ² [張]とは形式としての運動の特徴の1種である。運動の張りとは筋肉が緊張し関節部が固く動かない状態である。また運動の緩みは筋肉が弛緩し関節部が動く状態である。
- ³ 〈いらいらする、怒る (G)、怒る (E)、思う、考える、気が付く、苦しみ、困る、呑気でいる〉は過去としての〈終わる pa〉であれば共起の容認度が比較的高いという回答をコンサルタントから得られた。

参考文献

- Comrie, Bernard. (1976) *Aspect*. Cambridge University Press. (山田小枝訳 (1988) 『アスペクト』、むぎ書房.)
- Emorrey, Karen. (2001) *Language, Cognition, and the Brain: Insights from Sign Language Research*. Lawrence Erlbaum.
- 市田泰弘 (2004) 「日本手話における韻律要素の文法化について—「遅さ」と「静止挿入」—」『日本手話学会第 30 回大会予稿集』、pp.14-17.
- (2005) 「手話の言語学 (5) 時間・空間と手の運動—日本手話の文法 (1) 「アスペクト」ほか」『月刊言語』、第 34 巻第 5 号、pp.92-99、大修館書店.
- Johnston, Trevor. and Schembri, Adam. (2007) *Australian Sign Language (Auslan): An Introduction to Sign Language Linguistics*. Cambridge University Press.
- Klima, Edward. S. and Bellugi, Ursula. (1979) *The Signs of Language*. Harvard University Press.
- 小藺江聡・木村晴美・市田泰弘 (2002) 「日本手話における視線の文法化—目の聞き方と眉の動きについて—」『日本手話学会第 28 回大会予稿集』、pp.38-41.
- 佐々木大介 (1998) 「日本手話のアスペクト表現」『日本手話学会第 24 回大会予稿集』、pp.54-57.
- Supalla, Ted. (1986) The Classifier System in American Sign Language. Craig, Collete. (ed.), *Noun Classes and Categorization*. Benjamins, pp.181-214.
- 米川明彦 (1984) 『手話言語の記述的研究』、明治書院.
- Zeshan, Ulrike. (2003) 'Classificatory' Construction in Indo-Pakistani Sign Language: Grammaticalization and Lexicalization Processes. Emmorey, Karen. (ed.), *Perspectives on Classifiers in Sign Language*. Lawrence Erlbaum, pp.113-141.
- Zwisterlood, Inge. (2012) Classifiers. Pfau, Roland. Steinbach, Markus. and Woll, Bencie. (ed.) *Sign Language an International Handbook*. De Gruyter Mouton, pp.158-186.

本稿における手話の凡例

1. 語、サインの示し方について

- ・本文中で日本手話語彙・表現を提示する場合、日本語の表現をあて山括弧で囲む。〈山〉
- ・複数の語彙、サインから構成される場合は等号でつなぐ。〈雨が降る〉、〈電灯＝点く〉
- ・語の右下にある「pa」は日本手話口形を示す。日本語口形はカタカナで示す。ただし口形は語、

サインの弁別に必要な場合のみ提示する。〈終わる pa〉、〈終わるオワル〉

2. 文の示し方について

- ・日本手話の文を提示する場合、本文中で使用した山括弧は使用しない。
- ・斜線は句の切れ目を示す。句内で連続するサインは等号でつなぐ。
- ・文中の pt1、pt2、pt3 は指示詞表現である。それぞれ一人称、二人称、三人称を示す。接語として他の語に音韻的に連続する場合、ハイフンで表現する。
- ・鍵括弧内は相当する日本語を記す。

本 / 読む = 中-pt1 「私は本を読んでいるところだ。」

・語彙、サインに口形以外の非手指表現が同時に表出される場合、また語、サインの内部形式が変化し派生する場合は角括弧内に示した。また非手指表現がかかる語彙、サイン、派生が適用される語彙、サインへハイフンでつなげている。

本 / 読むー [一回性・運動の張り・静止] = 中-pt3 「彼／彼女はしばらくの間、本を読み続けている。」

・クラシファイアーを利用し慣習的でない表現では「CL-じゃれる」のように、「CL」でクラシファイアーであることを示す。そして意味を併記する。犬 CL-じゃれる 「犬がじゃれる」

付録 調査で使った表現

人が主体＜遊ぶ、イス＝作る、教える、泳ぐ、書く、決める、呼吸する、草を刈る、車＝押す、車＝綱で引く、結婚する、合格する、コップで飲む（一回）、コップで飲む（複数）、財布＝落とす、死ぬ、喋る、手話で話す、スキーで滑る、咳をする、卒業する、食べる、朝ご飯＝食べる、泣く（一回）、泣く（複数）、入学する、縫う、ノックする、働く、発見する、髭を剃る、ビデオを借りる、人が別れる、勉強する、ほうきで掃く、本＝読む、目が覚める、持つ、読む、練習する、笑う＞、**身体を使う動作**＜イスに座る、蹴る、触る（一回）、触る（複数）、立つ、跳ぶ＞、**人の存在・移動**＜いる、ある、行く、来る、歩く、学校＝へ＝歩く、走る、1km＝走る、出発する、到着する、大阪＝到着する＞、**認知活動**＜痛む、いらいらする、うんざりする、怒る（E）、怒る（G）、思う、考え違いをする、考える、気が付く、苦しむ、好む、困る、知っている、信じる、優れる、単語＝忘れる、疲れる、納得する、呑気である、ほっとする、見る＞、**ものが主体**＜雨が降る、雨が止む、ガラス＝割れて散る、桜が散る、地面が揺れる、大会＝終わる、大会＝始まる、電車＝止まる、電灯＝消える、電灯＝点く、弁当＝残る、窓が閉じる、燃える＞、**ものの存在、移動**＜郵便物が届く、飛行機が降下する、飛行機が出発する、飛行機が到着する、船が離れる＞、**状態、性質**＜赤い、暑い、おいしい、面白い、かわいい、汚い、きれいだ、様々だ、寒い、静か、象＝大きい、空＝青い、力強い、できる、鉄＝硬い、似合う、必要とする、人が離れる、ボール＝軽い、ボール＝丸い、難しい＞

